「家計行動のミクロ経済分析」

- 日　時：2011 年 6 月 29 日(水)
- 場　所：一橋大学経済研究所
- 主　催：科学研究費若手研究(S)、定例研究（共催）
- プログラム：

10 時 30 分-12 時 00 分

座長 黒崎卓（一橋大学）

報告者 阿部修人（一橋大学）

「Homescan による家計別インフレ率の特徴」（塩谷匡介[日本銀行]との共著）

討論者 北村行伸（一橋大学）

13 時 30 分-15 時 00 分

座長 北村行伸（一橋大学）

報告者 山田知明（明治大学商学部）

「所得リスク、中位投票者と所得再分配政策」

討論者 鈴木通雄（東京大学大学院経済学研究科）

15 時 10 分-16 時 40 分

座長 阿部修人（一橋大学）

報告者 安部由起子（北海道大学大学院経済学研究科）

「女性の就業と家計の居住地選択ーー男女雇用機会均等法の影響を中心にーー」

討論者 中島賢太郎（東北大学大学院経済学研究科）

16 時 50 分-18 時 20 分

座長 有本寛（一橋大学）

報告者 小原美紀（大阪大学大学院国際公共政策研究科）

「母親の就労が家計生産に与える影響」（神谷佑介[国際協力機構]との共著）

討論者 山内慎子（政策研究大学院大学）

19 時 00 分-21 時 00 分　レセプション

マーキュリータワー7 階　ホール（東キャンパス）

発表された論文

■ 阿部修人「Homescanによる家計別インフレ率の特徴」

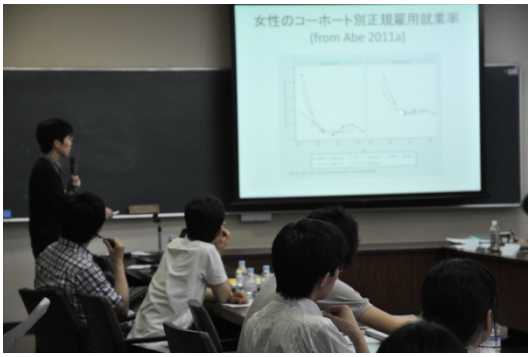
阿部・塩谷氏は、ホームスキャンデータに基づき家計別インフレ率を計算して、その性質に関する報告を行いました。家計別インフレ率を実際の家計の取引価格を用いて作成する場合、価格変化を計算できる商品は、比較時点と基準時点の両方で購入されている商品だけとなります。年次であればそうした商品の限定は大きな問題とならず、代表的な商品価格のみを用いる標準的なCPIよりも優れた性質を有しますが、月次の場合は、商品の数が少なくなりすぎ、パーシェとラスパイレスが逆転する等、奇妙な現象が生じることが報告されました。その後、ホームスキャンを用いる場合の注意点や伝統的CPIへのインプリケーションに関する議論がなされました。

■ 山田知明氏「所得リスク、中位投票者と所得再分配政策」

山田氏は慶應家計パネルを利用しながら、最適所得税率、資本税率が中位投票者により決定されるような、労働供給を内生化した動学一般均衡モデルを構築し、日本経済をカリブレートしました。その結果、中位投票者ルールに基づく最適所得税率は、計画者による最適税率よりも過大となるという結果を得ています。これは、所得変動リスクにさらされる家計が所得変動を嫌がり、過剰な所得再分配を求めるためです。その後、カリブレーションの詳細に関する議論がなされ、特に極めて重要な消費の異時点間代替パラメターに関する仮定が強すぎるか否かが議論となりました。

■ 安部由起子氏「女性の就業と家計の居住地選択--男女雇用機会均等法の影響を中心に--」

安部氏は、男女機会均等法が施行された後に労働市場に参入した女性に特に注目し、国勢調査や就業構造基本調査を用い、女性の正規労働力比率に有意なコホート効果があること、さらにそのコホート効果に大きな地域差があることを見出しました。安部氏の推定では、均等法が正規就業率に正の影響を与えたのは東京の大卒のみであり、大卒女性が東京でのみ、その能力が発揮できる環境にあるのではないかという議論を行いました。その後、人口移動は大学入学時点で生じている可能性が高く、雇用機会均等法とは関係ない可能性があること、公務員は均等法が成立する前から男女平等であるため、正規就業は民間事業所に限定して分析するべき、等の点が議論されました。



■ 小原美紀氏「母親の就労が家計生産に与える影響」

小原氏はホームスキャンデータに基づき、子供のいる女性の就業状況が家庭内生産に有意な影響を与えるか否かに関する報告を行いました。先進国の先行研究では、女性の就業状況は家庭内生産に効果を与えないというものが多いですが、麺類支出に占めるインスタント比率、穀類支出に占めるパック米比率を就業状況を含む多くの変数に回帰した結果、固定効果でも女性の就業により、より時間のかからない食料に対する支出が増加するという結果を得ました。その後、購買時間や購買頻度等の情報がどれだけ有効か、はたしてパック米が普通の米に比べて家庭内労働強度の(負の)指標として適切であるか否かに関して議論が行われました。

レセプション

当日は会議終了後、東キャンパスマーキュリータワー7 階ホールにおいて、レセプションが盛大に行われ、報告者・討論者以外にも、学内外の多くの方々や学生達が参加されました。レセプションでは、会議に引き続き活発な意見交換が交わされ、最後は阿部が挨拶し終了しました。次は、2012 年の春に主に国外の研究者を招聘し、ホームスキャンを用いた研究に関する国際コンファレンスを開催する予定です。